

南丹市ヒアリング調査結果概要

令和6年7月

目 次

I	こども計画策定に向けたヒアリング調査の概要.....	1
1.	目的.....	1
2.	主な調査項目.....	1
3.	実施状況.....	2
II	子ども・子育て関係機関・団体等ヒアリング調査結果.....	3
1.	教育・保育について感じる問題点や課題.....	3
(1)	子どもに関する問題点や課題.....	3
(2)	研修等の人材育成に関する問題点や課題.....	5
2.	「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題等.....	6
3.	子どもや保護者が特に求めていると感じている支援.....	8
III	子どもの引きこもり・不登校等支援団体等ヒアリング調査結果.....	10
1.	経済的に困窮している家庭や子どもの状況等.....	10
(1)	子どもの状況・課題.....	10
(2)	家庭の状況・課題.....	11
2.	「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題等.....	12
3.	子育てに関する相談・対応について.....	13
4.	近年の変化、支援ニーズ等の変化について.....	14

I こども計画策定に向けたヒアリング調査の概要

1. 目的

本調査は、こども計画の策定に向けて、市内で子育て支援等に携わる方々、子どもの引きこもり・不登校等の支援に携わる方々の活動内容やご意見等を把握するために実施しました。

調査は「子ども・子育てに関する関係機関・団体」と「子どもの引きこもり・不登校・居場所等支援関連団体等」に分けて実施しています。

2. 主な調査項目

【子ども・子育てに関する関係機関・団体】

- 関係機関・団体の概要について
- 教育・保育について感じる問題点や課題
- 「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題
- 子どもや保護者が特に求めていると感じている支援、そのために必要なこと
- 子どもの遊び場について感じる問題点や課題
- 保護者等の交流や居場所について感じる問題点や課題
- 特別な支援について
- 子育てに関する相談・対応について
- 子育てに関する貴団体・事業所の情報発信について
- 他事業所や団体、関係機関等との連携や協働について
- 市の子育て支援に対して感じていること

【子どもの引きこもり・不登校・居場所等支援関連団体等】

- 関係機関・団体の概要について
- 経済的に困窮している家庭や子どもの状況等
- 「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題等
- 支援内容
- 経済的困難を抱える子どもやその保護者を支えるために、特に必要と考えられる支援や取組
- 子育てに関する相談・対応について
- 近年の変化、支援ニーズ等の変化について、気づいたこと
- 他事業所や団体、関係機関等との連携や協働について
- 市の子育て支援に対して感じていること

3. 実施状況

2024 年6月に、「子ども・子育てに関する関係機関・団体」と「子どもの引きこもり・不登校・居場所等支援関連団体等」に対して、調査票への記入によるヒアリング調査を実施しました。

【子ども・子育てに関する関係機関・団体】

名称	関係機関・団体の種別
特定非営利活動法人グローアップ	NPO
すくすくやぎっこ	ボランティア団体
ひよしこども園	認定こども園
みやまこども園	認定こども園
みやま子育てパートナーズ「よっといで」	ボランティア団体
南丹市立園部小学校	学校
南丹市立園部中学校	学校
南丹市立園部保育所	保育所
南丹市立園部幼稚園	幼稚園
南丹市立胡麻郷小学校	学校
南丹市立城南保育所	保育所
京都府立丹波支援学校	学校
殿田小学校	学校
南丹市立殿田中学校	学校
南丹市立八木西小学校	学校
八木中央幼児学園	幼児学園
南丹市立八木中学校	学校
八木東小学校	学校
八木東幼児学園	保育所
南丹市立美山小学校	学校
南丹市立美山中学校	学校
南丹市教育委員会 社会教育課	放課後児童クラブ

【子どもの引きこもり・不登校・居場所等支援関連団体等】

名称・所属
みんなの TERAKOYA おおいがわ
特定非営利活動法人グローアップ
スクールカウンセラー
ドリームえんじんネットワーク
京都府まなび・生活アドバイザー(通称:スクールソーシャルワーカー)
南丹市立園部中学校
南丹市社会福祉協議会 生活相談センター
南丹市民生児童委員 主任児童委員
日吉町民児協 主任児童委員
南丹市母子寡婦福祉会
民生主任児童委員

Ⅱ 子ども・子育て関係機関・団体等ヒアリング調査結果

1. 教育・保育について感じる問題点や課題

(1) 子どもに関する問題点や課題

- 子どもの数は減少しているものの、課題を抱える子どもが増加している。
- 地域での交流の減少から、人間関係が希薄化しており、地域の教育力が低下している。
- スマートフォン等に頼った子育てによって、親の子どもへの愛着形成に問題がみられるという指摘もある。
- 身体的な発育でも「体感が弱い」「バランス感覚が弱い」「手先が不器用」「座位の保持が難しい」などの問題が挙げられている。

(ヒアリング内容)

子どもに関する問題点や課題
・家庭保育をしている家庭で、ひろばなどにも今まで来たことが無かった人がいるようです。(人見知りかひどいので初めてひろばに来ましたとすこやかに来られましたが)親の人見知りも強く影響にあるかと思います。
・子供の人数が減っている事 ・保護者に時間やお金の余裕がない事
・愛着形成の希薄→不安定さ・大人への欲求が強い・ストレスを感じやすい ・少子化による園児数の減小→小集団での経験、体験
・近年、課題のある子どもが多く、個別支援の必要な子どもが多い。また、SNSの普及は子どもへの影響力も多く、スマートフォンを見続けたり、育児がそれに頼ったりする、傾向があり、家庭によっては親子の関わりが希薄になっている。 ・親の生活に合わせて夜型の生活の子が増え、登園時間が遅く、覚醒していない状態で来るため、遊びこみにくい面が見られる。 ・保育が変わっても、保護者の意識を変えることが困難であるため、連携を取って保育を進めていきにくい。
・美山では少子化が進み、又高齢化で集落内に子ども達がいらない所が多い現状。 ・地域の者と子ども達の交流、又地域内で子ども同士が遊ぶ姿がほとんど見られない。
・発達障害、愛着における課題、家庭での生活が落ち着かないなど様々な理由から、個別の支援を要する児童が多い。 ・語彙力の低さや自分の気持ちを言葉で表現することが苦手な児童が多い。また、自分の主張はするが、相手の気持ちを理解することが難しいなど、コミュニケーション能力に弱さがみられる。 ・体幹が弱く、正しい姿勢で椅子に座れない、協調運動が苦手、身体のバランス感覚が弱い、手先が不器用など、体つくりの面でも課題が見られる。
・人間関係の希薄化 つながりを持たない、つながり方を知らない ・SNSによる交流が日常化し、それによるトラブルが頻繁に起こる。 ・子どもが地域(行事)に関わる機会がない。地域の教育力も低下している。
・スマートフォン、タブレット等による動画、ゲームに子育てを頼り切っている保護者の増加により、愛着形成ができていない子どもが多く、保育者に構ってほしい行動をとる。反面、事細かに子どもの行動に対する評価をする保護者もあり、閉塞感を感じている子どももいる。

子どもに関する問題点や課題
・特別支援児、要保護家庭児童の増加により、精一杯子ども達には関わっているが、職員数が十分でないの で丁寧な関わりができていない状況である。 ・年々経験不足で体ができていない子どもが増えている。5歳児でも給食時で座位の保持が難しい、お箸が もてない子どもがいる。子育て発達支援センターでOT相談にお世話になる子どもも増えている。 ・延長保育利用について家庭支援での理由で利用というのは理解できる。しかしながら、子育て支援は保護 者は利点があるが、母とのかかわりを求めている子どもに対してはどうなのか考えさせられる。子ども主体 でない世界であることを痛感する。
・食の偏り、食わず嫌い 頭では理解できているが、体験が伴っていない 戸外遊びの経験が少ない 体が不器用
・生活様式や保護者の価値観が多様化しているなか、学校として望んでいる子どもの成長について方向性 が合わなかったり、理解を得られなかったりすることがある。
・幼稚園利用の減少 保育所は乳児、3歳未満児保育の定員を超える利用ニーズ 乳児、3歳未満児の保育士配置基準 親子共に様々な実体験が少ない
・価値観や生活様式が多様化し、子どもの育ちをめぐる環境や親の子育て環境が変化してきている。 就学前施設が充実(一般化)してきていることもあるのか、子どもの就学先について以前に比べると早い段 階で支援学校を選択されているケースが増えているように感じる。(問題点や課題ではありませんが)
・豊かな体験が不足していること(バーチャルな経験>リアルな体験)。 ・近所に子どもが少なく、子ども同士が関係をつくる場がほぼ学校に限られる。
・学習に対する意欲の低下や学習習慣が確立していないこと ・ゲーム・スマートフォン等の使用時間の長さによる生活リズムの崩れ
複雑な背景(家庭環境等)をもち、学校や学習に気持ちを向けることが難しい児童がいる。
・保育所ニーズの増加(特に3号認定保育の増加) ・愛着形成に課題をもっている子どもが増えていると感じる。 ・SNS等の普及により直接体験の乏しさ
・めまぐるしく変化する現代社会の影響を受けて、学習環境や家庭環境に困難を抱えた生徒が一定数存在 する。更に、LGBTQや日常の中で配慮や支援を必要とする生徒も散見され、個別の関わりを要する場面 が多い。
・基本的な生活習慣「早寝 早起き 朝ご飯」が整っていない家庭に、生活や学力課題があり、自己肯定感も低 い。(非認知能力が育っていない) ・幼いころからの読書環境に課題がある。(保護者の意識差、図書環境差) ・少子化のため、幼いときからの固定された人間関係がある。 ・言われたことはやる受け身の児童が多い。自ら考え行動する主体性を育てたい。 ・交友関係が狭い。・体力低下がある。(バス通学・小学校以降の遊び不足)
・様々な幅広い経験の不足 実体験はないが知識はある(動画等の普及など) 基本的な生活習慣が身につかない(早寝早起き・食事・排便など)
・社会や、子どもを育む環境が大きく変わり、子どもが育ちにくい環境になってきている。具体的には、幼少 期から多くの子に与えられざるを得ないモバイル端末に育てられている環境や、自由に外で遊びにくい社 会への変化、少子化による子ども社会の欠如など。
・人数が少なく人間関係が固定化されることで、人間関係を構築するための経験や体験が不足しがちで、多 様な意見に触れ合ったり誰かと競い合い切磋琢磨する機会が少ない。

子どもに関する問題点や課題
・年々、放課後児童クラブの利用者が増加している。6年生までを受け入れしており、小学校では、支援学級に在籍する児童も受け入れている。集団行動が取れない児童に対し指導の困難さが見受けられる。

(2) 研修等の人材育成に関する問題点や課題

○多忙な中での研修は、研修機会の確保の難しさと業務への圧迫が懸念されている。 ○人材不足によって研修の時間が確保できない。 ○教育環境の変化によって学ぶべきことも増加しているが、時間的な余裕がなく、組織での知識共有や深い学びに結びつきにくい。
--

(ヒアリング内容)

研修等の人材育成に関する問題点や課題
・研修予算費の削減で研修選択が難しい
・時間不足。 ・研修を受けても、それを職員間で共有したり、前向きにとらえ学びを保育に生かしたりしていこうとする職員ばかりではないということ。ベテランの保育士ほど、アップデートできない。
・校内研修や京都府総合教育センターなどの受講など、様々な研修を充実させている。しかし、業務も多忙であり、研修による出張の代行を行う職員の人数も限られていることから、研修機会を確保することが困難。研修が増えることで多忙感が増すことも懸念される場所である。 ・若手教員が多く、校内での OJT を充実させる必要がある。かなり労力が必要。
・講師を招聘した際に発生する予算面の課題がある。(限られた予算) ・若い層、中堅層と対象にマッチした研修会が必要。学校では若手からベテランまでの幅広い層を対象とする研修会が殆どであるため。
・経験年数の浅い正規職員が多く中間層の職員がいない。 ・経験年数の浅い保育者達が互いに切磋琢磨ができるよう研修の機会を設けたり、所長・補佐で指導を行うが、他の所にも指導が必要であることや職員体制が整わず、所長・補佐もフリーで保育に入るため、人材育成が追いついていない。 ・ここ数年、南丹市に同じ講師に研修をお世話になっている。数年前と比較すると人材育成は進んでいるようにも感じている。
・市の財政難のため、職員の研修費(講師料)も削られ、研修の機会が少なくなっている。また、保育所は保育士不足のため、十分な研修の時間も確保できない。
・校内、校外での研修機会はあるが、じっくり腰を据えて人材育成について話をしたり指導・支援をしたりする機会が十分にとれない現状がある。
・保育内容や資質向上のための研修の機会は増えているが、全員が揃って同じ研修を受けたり研究を深めたりする機会がもてないため、共通理解ができにくい。 有識者の指導
・自分のことで精一杯で人材育成という視点が弱いように感じる。 ・学校現場は身に付けておかななくてはならないことが年々増えている状況で学ばなくてはならないことも増え、中長期的な視点での人材育成のプランニングが十分でないように感じる。
・ベテラン教員と若手教員に比べ、40代の教員が少ないため、中堅教員への負担が大きい。

研修等の人材育成に関する問題点や課題
・多忙による研修時間や機会の確保(特に授業改善に係る研修) ・若手教員の人権教育研修不足(センター研修や校内研修の活用)
・子どもが長時間いる中で、職員全員の研修時間の確保が難しい。(外部研修参加・職員間連携・共有ができてにくい) ・職員不足、職員層の薄さ(中堅職員不足)による人材育成の難しさ
・若手教員の増加に伴い、生徒指導上の対応や個別の支援方法等、経験豊富な教員から若手へ、世代間の伝達が課題である。加えて、校内だけでは対応しきれない複雑多様化した事例について、関係機関との連携等を含めた適切な対応の在り方について OJT による研修を充実させる必要がある。
・悉皆研修や、若手育成のための研修、校務分掌に準じた研修等があり、学びにつながっているが、学びの成果をどれほど日常の指導に活かしているかは個人任せとなっている。 ・互いに子どもの実態を把握している上で行う校内研修会を、いかに充実させ、日常の指導に活かせるかが大切であると考えている。特別支援教育の充実も大切である。 ・ここ数年で、管理職も若返る。学校運営を担う人材育成が急務である。
・ゆったり研修会を持つ時間的人的余裕がない
・以前と違い、保護者と学校・園との関係性が変わってきていることもあり、人数は減っているが、明らかに業務は増えている。大きく仕組みを変えないと、人が伸びようとする精神的・物理的な余白時間が少なすぎる。育つ前につぶれる、つぶされることもあり、大きな仕組みの転換もしくは定数の増が喫緊の課題。
・どうしても遠方になるため、交通手段も限られていることによる講師派遣を断念せざるを得ないことがある。
・支援員はすべて会計年度任用職員であり、週5日勤務者は少なく、週3日であったり代替勤務者も多い。全支援員(補助員)に対し、一堂に会しての研修などは実施が難しく、シフト勤務に余裕がないため、研修の機会は制限されている。

2. 「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題等

- 子どもの減少や保護者の就業率の上昇によって、イベント等での集客が減少している。
- 子育て支援の必要な家庭ほど SOS が出しにくく、支援を必要としている家庭が見えにくい。
- 人材不足によって、望まれる取組や活動に制限が生じてしまう。また、新たな取組を行うためには、これまで行ってきた取組を減らすなど業務量の総体を考慮する必要がある。

(ヒアリング内容)

活動上の問題点や課題
・保育所入所の年齢が早くなることで、子育てひろばとの関わりの期間がかなり短くなっています。ひろばに足を運ぶことが日常となり、相談しやすい場所があると認識するまでの関わり方の工夫がより必要になってきました。今子育てする親子さんたちのニーズの聞き取りと、活動へ反映する仕組みの構築が大切だと思います。
・子供が減って、尚且つ、保護者の方はすぐに仕事に復帰したり仕事を始めたり、時間もお金の余裕がなく毎日を過ごすのに精一杯。 ・イベントを開催しても参加人数が少ない。

活動上の問題点や課題
・保護者の就労形態から行事等を利用しての計画が難しい(行事の回数など配慮)
・正規職員の減少で、正規職員の負担が大きい。
・急速に少子化が進み、地域にほとんど子どもがいない ・1才から保育所に入所する子がほとんどで、平日に子どもの姿を見る事がない ・1才から入所せず家庭で育児している人(母親、祖父母)を見かけない ・平日の未就園児をもつ親子の活動ができない ・スタッフの高齢化により、活動するスタッフ数が減少し、新たにスタッフとして一緒に働いてくれる人がいない(人口減、仕事を持っている等で)
・家庭支援や保護者支援が必要で学校だけでは対応しきれないケースが多い。 ・子育て支援の必要な家庭が見えにくい。また、必要な家庭ほどSOSが出にくい。
・自分の子どもに関心は強くあるが、子どもの課題や問題に対して原因を考えたり、何とか相談したりしようとする姿勢に弱さが見られる。当事者意識が低く、他人事と捉えている傾向が強い。従って、支援を行うにしても、無関心であったり、問題に向き合えなかったりといった現状がある。
・当保育所では、子育て支援をある程度はしているが、要保護家庭にもっときめ細やかな支援が必要と考えるが、人材不足が一番の課題である。 ・地域に開かれた保育所となるべく、保育所開放日を設けたい思いはあるが、園児数も多く、遊ぶ場所も確保できない。 ・2026年～『こども誰でも通園制度』の本格始動が目指されている。しかしながら、本市においては、人材不足のため実施できないのではないかと。
・幼稚園の園児減少の要因として、長期夏季休業があること、給食がないことが考えられる。8月は保育料を徴収していないため、登園日を設定していない。
・学校教育が担うところと関係機関等が担うところとがあり、連携が進められている部分も増えているが、学校現場の考えや意向と関係機関の考え等とにずれが生じることがあり、子どもや家庭への対応に苦慮することがある。
・一時預かり事業に取り組みたいが、クラスの定員を満たしていたり人員不足が関わったりして受け入れられない年齢がある。 ・体調を崩した子ども・病気の子どもの保育と病児保育利用のハードル
・価値観の多様化、保護者の多忙化により、PTA 活動の充実と持続可能な取組のバランスを考える時期に来ていること。
・学校教育活動中での時間確保の難しさ ・言葉の壁を抱える(日本語を理解できない)家族のフォロー。学校と行政が更に連携できれば個人の善意に頼ることが減ると感じる。
・家庭を支援しているこども家庭課の支援員を増やしてほしい。現状では対応が困難であり、支援員が疲弊してしまう。
・一時保育希望者があるが、受け入れ体制(人材)が整っていない。 ・子育て支援として就労に関係のない延長保育の利用など必要性は理解している。しかし、長時間子どもを預かることで、保護者の就労の保障やリフレッシュの時間の確保はされているが、その分のしわ寄せが子どもに伝わっているように感じる。忙しい日々のなか、保護者が負担に感じることなく子どもと一緒に過ごす時間の大切さを感じたり楽しんだりできるよう援助、啓発することの難しさを感じる。
・学校管理下における怪我で子どもが受診する際に、南丹市の子育て支援医療費助成と日本スポーツ振興センター災害共済給付制度が併用できてしまう。たより等で保護者に周知しているが保護者判断で併用されている事例が多く、南丹市の医療費として改善する余地がある。
・保護者同士の連携が年々希薄になっているように感じる。ライン等でつながっている保護者とそうでない保護者。保護者の年齢層におけるジェネレーションギャップも感じる。小学校では校則はないが、髪の毛の

活動上の問題点や課題
色、ピアス、ネイル等、保護者が子どもにさせている家庭も増えている。様々な社会の変化や個性重視の世の中で、一概に否定はしないが、学校教育と家庭教育の連携をしていく上で、大きな課題となっている。
・保護者も地域や家庭で孤立している気がする。子育てに悩みがあっても、特別支援に関する発達の課題については、家族に理解を得られない場合も聞く。学校側から丁寧に話を聞き取り、情報交換し、子育ての努力や悩みに理解を示しながら、子どもを真ん中に置いた交流を積極的に行っていく必要がある。
・取り組む人材が少ない(担任をもたないのは園長のみ) 現場に余裕がないので、未就園児等を対象にした園開放などではない。 家庭支援を要する子どもが保育所を利用している。そのフォローで保育所としては手がいっぱいである
・関連する活動を行う者同士が、『目的』を明確に共有しにくいことがあります。何のための何の事業なのかをしっかりと共有しないと、活動を『する』ことが目的になってしまい、本来あるべき『活動をする目的』とずれてしまうことがあります。先にも述べた通り、業務量として限界に達している中、新たに取り組むには『目的の共有』を十分にした上で、新たな事業に取り組むときは必ず従前の事業を減らすなどのバランス感覚も必要と考えます。
・どのクラブも基本的には、施設内または隣接する学校敷地等での外遊びで過ごす。支援員数も限られているため、以前は郊外に出かけたり、野外活動もしていたが、そのような余裕はない。施設内での活動となると内容も制限されるため、長期休暇中は、ボランティアに来てもらいイベントを組むなど工夫を凝らしている。

3. 子どもや保護者が特に求めていると感じている支援

<子ども> ・遊び場・体験の場、安心して過ごせる居場所、食事の確保、家庭内での精神的な安定、雨天時でも遊べる場所、部活動の活性化、安心・安全な学校、大人が自分のことを見てくれているという安心感
<保護者> ・一時保育や預かりの場、病児保育、母親同士交流できる場所、経済的な支援、土曜保育の時間の延長、日曜日の保育、保育の可視化、学力向上、体力向上、給食費の無償化、家庭内で解決することが難しい課題の相談

(ヒアリング内容)

活動上の問題点や課題
・保護者は一時保育や預かりの場を求めています。
・素敵な思い出作り(お家でなかなか出来ない、子供にしてあげられないような事)
・病児保育がもっと身近に利用できる環境
・子育て世帯の求める遊び場・体験の場
・保護者の就労に関係なく、園で保育を受ける家庭が多い。それだけ、家庭保育に対しての保護者の意識が弱く、園に求める意識が強い印象を受ける。
・子ども同士遊ばせられるところ、母親同士交流できる場所
・気楽に話したり、手助けしたり相談できる近所のおばさんの存在

活動上の問題点や課題
・子どもの居場所づくり・・・放課後児童クラブが高学年まで利用可など、様々な支援が進んでいるものの、地域で児童が過ごす場所や大人の見守りが少ないのではないかな。
・経済的な支援を必要とする家庭が多い。 ・子どもは食事面の確保や、家庭内での精神的な安定を求めているので、それらを保障することが必要に感じる。
・介護職や看護師の保護者のため土曜保育の時間の延長。日曜日にも保育の実施、19:00移行の保育も希望されていると思う。 ・保護者の活字離れや外国にルーツがある保護者等の実態があり、もっと保育の可視化を進めていくことを求められているのではないかな。 ・土日の過ごし方について雨天時でも朝から夕方まで子どもを遊ばせたり、飲食もできたりする場所を望んでいるのではと感じている。 ・いつでも気軽にフラ～と訪れ、保護者はボ～としたり、誰かとしゃべったりしたいと思いつているのではないかな。居場所(子育てセンターとは違って)がほしい、子どもはその施設の方にお任せしたいと考えているのではと思う。
・預かり保育の利用条件の拡大、保護者が集まって交流できる場所の提供、親子で遊べる場所の提供
・登下校の児童の安全見守り(地域の方とともに子どもを見守る環境) ・学力向上、体力向上
・体験、多様な保育(就労以外)、休日保育
・放課後児童クラブの利用者が多く、保護者のニーズが年々高まっている。
① 学力の向上、そのうえでの進路保障 ② 部活動の活性化 ③ 安心・安全な学校
① 放課後ディサービスの充実 ② 給食費の無償化 ③ 教員の複数配置によるきめ細やかな支援
・完全給食(今は幼児は副食のみ)の提供 ・子どもは保護者とのゆったりとした触れ合いの中で安心安定を求めている。 ・保護者は悩みを出したり、リフレッシュできる場やつながりを求めている。
・子ども:大人が自分のことを見てくれているという安心感。特に家庭でそれが充足されていない場合は、教員との関わりでその安心感を求めているように見受けられる。保護者:家庭内で解決することが難しい課題の相談や、他機関に繋がる際の窓口。
・特性のある(学びにくさ、こだわり、発達課題等)子どもの実態に応じた関わり方の支援、相談活動(SC等) ・様々な先生(担任、担任外、SC、心の居場所サポーター、特別支援コーディネーター、養護教諭、管理職等)の関わり。(生徒指導、安心・安全な居場所) ・保護者自身も相談したい、聞いてほしい、教えてほしいと願っている。また我が子と同級生の実態を比べている。 ・内容によっては、関係諸機関(発達支援センター、言葉の教室、医療、放課後児童クラブ、放課後DAY、児童支援「さくら」「ruri」、丹波支援学校地域連携、子南丹市の子育て支援 等)につなげ連携していく。
・安心して遊べる場所(公園・図書室など)
・学校外(内もですが)の安心して過ごせる居場所。
・保護者からは更なる受け入れ時間の延長(18時30分⇒19時00分)や、保護者の就労以外の事由(授業参観、家庭訪問など)による受け入れの要望がある。

Ⅲ 子どもの引きこもり・不登校等支援団体等ヒアリング調査結果

1. 経済的に困窮している家庭や子どもの状況等

(1) 子どもの状況・課題

- 生きづらさを抱えている子どもへの支援が届いていない。また、周囲の理解が得られない場合がある。
- 虐待による転居での転入生が増えている。
- 学校卒業後の支援の途切れ、居場所が問題となっている。

(ヒアリング内容)

子どもの状況・課題
【状況】優しく、まじめな子ほど親や友達に嫌な思いをさせないように気を使っています。自分の気持ちを押し殺して、意思を伝えず我慢をしています。 【課題】つらい気持ちを伝えたときに相談しても、気持ちに寄り添えない相談者にあたっていることが多いようです。
・妊娠期から学童期において、様々な家庭が南丹市で生活していますが課題のある家庭については行政がいち早く支援をされています。気になる家族が関わりの中であった場合については包括会議にて共有案件として報告させていただいています。 ・若者の状況については、中部医療看護専門学校教員よりの相談案件として、学生の中には親からの経済支援が乏しく、一日の食事に困窮する学生がいるとの実態を聞かせていただきました。また自身の生育歴から、家庭を持つことへの疑問や拒否がある学生も一定数いるとのことでした。
・友達関係(個性、思春期、SNSでの交流など)のトラブル ・学業不振 【課題】 ・自分を守る表現力や、対人スキルの向上
・肌の触れ合いを求めてくる子が多いと感じる。
・不登校・貧困・発達障害・過剰適応等に伴う生きづらさや生活・就学上の課題が、中学3年の進路選択の時(2学期)に顕在化しやすく、高等教育を安定して就学するために必要なストレス耐性・自己理解・セルフケアスキル・セーフティーネット等の基盤を中学在学中に整備することが困難な子ども・家庭が増加傾向にあり、中学校の対応キャパシティを超えている。
・虐待による転居での転入生が増えている。虐待による傷つきによって不適応状態が起こっている可能性もあり、保護者も子どもと同様に傷を負っている。転入してきた一家を、心理的、経済的にも支えることが必要だと感じる。繊細な児童生徒が増えており、大人が遅くさせようとして厳しく当たったり突き放すことが本人の苦痛を増す。周囲の目も厳しくなることもあり、孤立しがち。
・ひきこもり等による自立困難 ・自己肯定感が低く、将来展望が描けない ・社会適応や生活能力の支障(障がい特性による、親の育児や躾状況による) ・学校卒業や施設退所による支援の途切れ ・中学校を卒業した後、進学せず、働いても続かない若者への支援、居場所がない ・発達に特性がありながらも、通常学級に在籍し、進学している生徒への支援、周囲の理解がない ・家庭に課題がある子ほど、自然体験等の体験学習の機会に乏しい
・家庭生活の中で質的・量的に十分に甘えきれていない子どもが学校生活の中で、自分を認めてもらえる場

子どもの状況・課題
所を求めるため、学校でも個別の対応を求め、集団生活に参加しにくく教室へ入れない子どもが増えてきているように感じる。

(2) 家庭の状況・課題

○保護者が生きづらさを抱えていることが多く、養育能力が低下している。 ○両親や祖父母などの近親者の理解不足による影響が大きく、自己否定感・居場所感の喪失の強化につながっている。
--

(ヒアリング内容)

家庭の状況・課題
【状況】子どもが素直に話してくれたことでも、気持ちに寄り添ってあげられていない親が多いです。 【課題】子どもの変化に気づかず、話を聞いた初動でもゆっくり子どもの気持ちを聴いてあげられていない。傷ついている子どもに自分の考えを押し付ける言葉がけをしている。
・(学生)親の経済的支援が無い、または自身のアルバイト代を親に振り込み、自身の生活が困窮している学生がいる
・保護者における不登校児童生徒の将来への不安(学習面) ・不登校児童生徒への関わり方の不安
【課題】 ・保護者に対して、不登校児童生徒の状況に応じた心のケアを行う
・親のこだわり(学校に対する考えや、食など)が、子どもにも影響していると感じる。
・家庭内で支配性が強い父親、祖父母の不登校に関する無理解、親の自己実現願望を子どもに過剰に課す、あるいは、放任による枠組の欠如、等から情緒交流が乏しい家庭環境・脆弱な愛着形成によって、自己否定感・居場所感の喪失の強化につながる逆境体験に子どもが追い込まれている。
・保護者も精一杯で子どもを見守る時間的、心理的ゆとりがない、と感じる。子どもはそれを察して、しんどさを伝えないことも多い。また、保護者に生きづらさを抱えている人が多く、養育能力が低下している状態を見聞きする。また、関わりを切っていく保護者もおられ、支援者が入りにくいことがある。
・ひとり親による収入や育児の制限 ・障がい(療育、精神障害、特性等)の診断や特徴のある親(生活能力が乏しい) ・子どもに障がい等ある場合の親の障がい受容の乏しさ ・ひとり親でもなく、非課税でもない世帯だが、多子を核家族で育てている世帯への経済的な支援が不足している ・外国人の親が日本語や日本の文化観の理解が出来ず、学校や地域との意思疎通が出来ない場合があり、子どもにも影響がでている【外国人の親へのサポートが乏しい】
・家庭生活において人間関係も複雑であり経済的にも厳しい家庭があり、毎日の生活に余裕がなく、規則正しい子どもの生活が守られていない。

2. 「子ども・子育て支援」に関連する活動を行う上での問題点や課題等

- ひきこもりや不登校の子を持つ家庭は、知られたくない為に潜在化してしまう。
- 精神疾患を抱えている保護者が、医療的支援を適切に受けていないことが子どもに影響してしまう。保護者の精神状態の不安定さが養育不安やネグレクトに直結している。
- 相談しづらい子どもの SOS に早く気づく取組、子どもが直接相談できる仕組みの構築が必要。

(ヒアリング内容)

活動上の問題点や課題
・家庭で関わる大人が笑顔で接することができるように、相談や癒しの場の提供などをしていますが、ひきこもりや不登校の子を持つ家庭は、誰にも知られたくないと思っています。大人も子どもまわりの視線を気にしながら生活をしています。なので、身近なところでは、隣近所に知られることが嫌で京都市内や京都府南部の方へ相談に行かれています。
・ひろばに来てくれる親子や妊婦に関しては、外に出て発散することができるほどの体力や気力があるので、日常の課題に対してのSOSを拾い上げることはできていると思います。潜在的にある課題や問題点を見つけるには、様々な機関との密な連携が必要かと思います。
・不登校の要因分析に関する調査研修(令和6年3月)によると、不登校児童生徒のきっかけ要因として、“相談、指導を受けた”児童生徒よりも“相談、指導を受けていない”児童生徒の方が「授業が分からない」「宿題ができない」の回答が多かった。このことから、子ども自身が「勉強できないのは自分が悪い」と思ったり、保護者が子どもを責めたりするなど相談に繋がりにくいケースがあるのではないかと考える。 【課題】 ・子どもの変化(SOS)に早く気づき、関係者が情報を共有し、現状把握、問題解決に取り組むなどチームとして支援をする。
・無料で参加できる優先クーポンが、子ども達の間で悪目立ちしていると聞いた。今後、無料クーポンだけが悪目立ちしないよう、その他クーポンも発行し誰もが参加しやすい状況を作っていく。
・精神疾患を抱えている保護者が、医療的支援を適切に受けていない。また、精神科医療機関の受診・服薬治療のみケースが多く、精神科リハビリテーション支援・精神障害者への地域生活支援などが欠如していることによって、保護者の精神状態の不安定さが養育不安やネグレクトに直結し、子どもへの成長・安定の阻害要因となって、結果として、就学上の不安定の要因となっている。
・18歳では、自立は難しい子どもが多いと感じる。支援を受けていなかった家庭で、子どもが中学を卒業して高校でつまづくと、親身に関わってくれる他人との関係がなくなると感じる。例えば高校に行けなくなったことで、神経発達症が疑われても、医療機関に連れていく保護者はなかなかいない。高校を卒業しても、その先で支援が必要なケースも多いと感じる。
・相談内容は様々であるが、相談は両親や家族などからが主であるため、子ども自身が困り感や悩みをもっているにもかかわらず直接的な相談にはつながらない。子ども自身が違和感や困り感に気付いて、相談できる手段を知って活用できるような仕組みや広報が必要 学校等、教育機関との連携に課題を感じる(個人情報取り扱い等に関して)
・関係機関との連携を積極的に進め、子どもへの支援を進めていきたいと思うが、守秘義務の壁があり、子どもに支援に必要な情報が共有できにくい。
・児童委員の方から情報を挙げても、その後の事やどうなったのか等何もその続きがないので、どう見守っていけばいいのか分からない。

3. 子育てに関する相談・対応について

- 相談という内容に至るまでの「悩み」や「不安」を伝える術がない保護者に対して、日常的な交流の場の必要性が指摘されている。
- 環境等を含めた複雑な問題を抱えている場合、従来のアセスメントでは限界があり、BPS(Bio-Psycho-Social)モデルによるアセスメントが必要だとの意見もある。
- 相談においては、子ども・家族・関係者の思いが異なり、それぞれに寄り添える相談者が必要。
- その他、母親が就労復帰を考える際、働いていないことを理由に子どもを保育所や施設に預けることができず、身動きが取れないケースがある。

(ヒアリング内容)

相談に関する問題点や課題について
・初回の相談では、相談の真意を十分に聴きだすことは難しいです。 - また、対象児と家族や関係者の思いは違います。 - それぞれに寄り添える相談者と連携して問題解決に挑まなければならないと思います。
・核家族や移住者が増え、子育てに協力してくれる親族が遠い家庭も増えてきている。夫婦の協力で子育て期を乗り越える方が増えているが、細かなニーズに対する行政サービスの内容の変更がかみ合わない時があり、どう対応したらよいのか悩むときがある。 - 例 つわり時の家事支援
・「SC がいるのを知らなかった」「こんな事相談していいのか分からなかった」など、誰に相談して良いのか分からず、「自分だけ頑張ろう」「我慢しよう」と考えているケースがいくつかあった。 【課題】 ・子育てや家庭問題に関する多様な相談に対応できるように、自らのスキルの幅を広げる。 ・適切な機関へ繋がれるように支援機関の情報把握に努める。 ・児童、保護者が気軽に相談できる環境づくりに取り組む。
・特別支援教育・発達障害に関する支援ニーズが増えており、教育の枠組だけでは限界がある。また、貧困の問題を混在しているケースで、従来の特別支援教育のアセスメントでは、子どもの個人の状態に限定され、BPS モデルに従ったアセスメントがされないことによって、二次障害を誘発しているケースが多い。 ・都市部では、不登校の子どもは、公共交通機関のインフラがあるため、単独移動ができるが、南丹市ではインフラが未整備のため、フリースクールなどへの送迎が保護者の負担となっており、不登校の子どものニーズに対応できていない。
・私の職種は、子育ての悩みを聞く仕事でもある。保護者を心理的に包み込み、支える気持ちでカウンセリングをしている。
・小さな子どもを持つ両親、特に母親が就労復帰を考える際、働いていないことを理由に子どもを保育所や施設に預けることができず、身動きが取れない ・子育てと就労の両立がしやすい環境が十分に整っていない ・養育に理解が乏しい保護者が世帯内で最も決定権がある場合 ・親が子育てを気軽に相談できる場が少ない
・毎日の生活の中で不安に思っていることを、どこの・誰に・どのように伝えていけばいいのかが伝わっていない。 ・気軽に相談できるサークル的(?)な活動を日常化していくことが必要ではないだろうか。
・現状把握は難しく、個人情報でもあり慎重に取り扱わねばなりません。 ・専門分野、機関等いつなげるより方法はないと思います。

4. 近年の変化、支援ニーズ等の変化について

- まだまだ、措置支援で物事をとらえる支援者が多いとの指摘があり、措置支援ではなく、本人の意見の尊重を促した支援、選べる支援を構築することが不可欠。
- 親が共働きの場合が多く、早期に保育所等に子どもを預けるため、子育てサロンのニーズが減少している。
- その他、SNS 等利用による交友関係の多様化、ひとり親家庭の増加、社会構造による問題の潜在化が表層的な理解で遷延化、家庭の教育力の低下、家庭関係の希薄・複雑さ、地域社会のつながりの弱さ、親の幼さ、親の価値観の多様化、などが挙げられている。

(ヒアリング内容)

支援ニーズ等の変化について
・まだまだ、措置支援で物事をとらえる支援者が多いと思います。 - 本人の意見の尊重を促した支援、選べる支援を構築することが不可欠だと思います。
・こどもの貧困や不登校、ひきこもりは様々な機関と連携して初めてわかるが増えてきていると思います。 - どのような支援が適切に必要な方に届くのか、実態としてどこまでこどもの貧困や若者の支援が必要なのかを活動の中だけでは分かりづらいと感じます。
・近年の変化として、SNS 等利用による人間関係、交友関係の多様化。 ・ひとり親家庭の増加。 ・継父(母)やパートナーとの様々な問題など。
・支援を受ける必要性や困り感を感じにくく、本人が何が問題なのかわからないまま、抱えている問題が静かに進行し、長期間にわたって遷延化している状況がある。結果として、子どもの問題として(特に思春期)表面化し教育現場の課題として位置づけられているが、本質的には、家族の生活上のセーティーネットが機能しない社会構造の潜在的ニーズであって、その隙間から拾えていない課題が顕在化して進行すると、本人の責任として、自己責任論に還元され、SOS すら発信することが恥として追い詰められ、支援ニーズが見えにくくなっている。
・保護者の支えがない(他府県から来て、人的援助を頼めない)ケースも多い。親戚や知り合いのいる、地元の人たちとの差はあると思う。子どもの側から見ると、守りの薄いところで認めてもらうことも少なく、疲れている印象。保護者自身が医療的支援が必要な場合も増えているように感じる。
・SNSの活用は進んでいるが、特に若年層では、直接電話で相談することなど抵抗感がある印象 ・親が共働きの場合が多く、早期に保育所等に子どもを預けるため、子育てサロンのニーズが減少している
・家庭の教育力の低下、家庭関係の希薄・複雑さ、家庭の貧困 - 地域社会のつながりの弱さ、親の幼さ、親の価値観の多様性 - 家庭で十分に甘えきれていない
・母子家庭に於いて、以前小学生を家で預かった事がありますが、現在は日吉に於いては母子の会員も少なく、ニーズが少なくなっているように思います。